



NICながおか通信

そいがあて

11月

(発行)

新潟日報・長岡販売店グループ

(印刷)

株第一印刷所

No.246

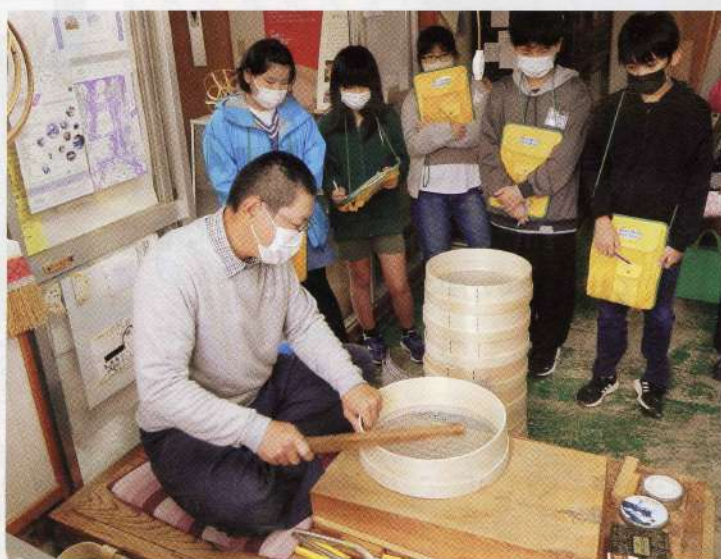
November

「そいがあて」とは長岡弁で納得した時の「相づち」の意味です



▲寺泊山田の曲物製品(企画展「越後のわっぱ―曲物づくりのいまむかし」より。長岡市立科学博物館提供)

▶工業用ふるいの製作過程を見せる足立茂久商店の足立照久さん。小学生たちは見学の後、小さな曲輪を使って工作体験も。ふるい作りの一端を楽しく学んだ



県伝統工芸品

寺泊山田の曲物

まげもの

新潟県が今年初めて指定した「県伝統工芸品」11品目の中から、「寺泊山田の曲物」を紹介する。総合学習の一環で見学に訪れた長岡市立寺泊小学校の子どもたちと一緒に、県内唯一の製造元、足立茂久商店取材した。

「今は世の中にあまりない仕事ですが、ずっと昔はふるいを作る『ふるいや』が、寺泊山田にたくさんあって発展しました」

昭和40年頃まで同地に十数軒の製造元があったが、農業の機械化などにより需要が減り、作手は徐々に減っていった。昭和57(1982)年、「大字山田の曲物製造技術」は旧寺泊町文化財(現長岡市無形文化財「工芸技術」)に指定された。

曲物とは、薄く板状にした木材を円形に曲げ、合わせ目を木の樹皮などでとじたもの。その歴史は長く、少なくとも奈良時代には生活用具として曲物製品が使われていたという。

日本海に面した寺泊山田集落では古くから、漁業・農業の冬の生業として、曲物の中でも農作業で使う「米通し」など、ふるい作りが盛んだ。山田の節業組合に伝わる江戸後期・天保13(1842)年の「仲間取究書」には、製造元である集落各戸の屋号と製品の売り先、取引価格などが記され、既にこの時点で組合が存在していたことが分かる。

暮らしに新しい曲物



伝統の技を生かし新たな製品も展開する。(時計回りに)曲輪ツール各40,590円、曲輪の球体(5寸・約16cm)9,625円から、シェードに小国和紙を用いた「ゆきほのか」テーブルライト33,000円

今昔の曲物を紹介

科学博物館で企画展



古くから人々の暮らしと共にあった曲物。その歴史を紹介する企画展「越後のわっぱ―曲物づくりのいまむかし」が11月26日から来年1月15日まで、長岡市立科学博物館(幸町2)で開かれる。写真はチラシ。

長岡市和島地域の山田郷内遺跡から出土した約700年前の手洗いおけをはじめ、和島地域の国指定史跡・八幡林官衙遺跡など県内各地の古代・中世の遺跡で発見された曲物を紹介。合わせて、現代まで製作技術を継承する長岡市寺泊山田の曲物づくりの道具・材料・製品などの資料を展示する。

▽越後のわっぱ―曲物づくりのいまむかし：11月26日～1月15日。入場無料。12月5日、19日、12月28日、1月4日は休館。幸町2-1-1さいわいプラザ1階。

○曲物づくりの実演と講座：12月4日午後2時～4時。さいわいプラザ3階の講座室。実演は足立茂久商店の足立照久さん。講座は科学博物館学芸員の丸山一昭さんが、遺跡から出土する越後の曲物について解説する。定員50人。申し込みは科学博物館、0258(32)0546。